経　済　港　湾　委　員　会　記　録（Ｎｏ.２２）

１　日　　時　　令和６年５月２４日（金）
　　午前１０時００分　開会
　　午前１０時５５分　閉会

２　場　　所　　第６委員会室

３　出席委員（９人）

委員長	吉田幸正	副委員長	渡辺修一
委員	田中元	委員	香月耕治
委員	渡辺徹	委員	世良俊明
委員	奥村直樹	委員	高橋都
委員	本田一郎		

４　欠席委員（０人）

５　出席説明員

産業経済局長	柴田泰平	企業立地・農林水産担当理事	山口博由
未来産業推進部長	森永康裕	スタートアップ推進課長	吉田智子
企業立地支援部長	城戸健一	企業立地支援課長	石橋孝通
物流拠点推進室長	神谷直秀	物流拠点推進室次長	池田弘幸

外　関係職員

６　事務局職員

委員会担当係長	松永知子	書記	西嶋真

７　付議事件及び会議結果

番号	付　　議　　事　　件	会　議　結　果
1	行政視察について	５月14日から16日に行った行政視察について、委員間で意見交換を行った。

８　会議の経過

○委員長（吉田幸正君）それでは、開会をいたします。

本日は、所管事務の調査を行います。

５月14日から16日に行いました行政視察について、委員間で意見交換を行います。他都市の先進的な取組に対する所感や、本市で取り組むべき事例、また、取組に当たっての問題点や課題などについて、意見交換を行っていきたいと思います。

本日の意見交換の内容は、正副委員長で取りまとめのうえ、議長に提出する行政視察報告書や所管事務調査の委員会報告書の中で反映させていただきたいと考えています。

本市の行政施策への反映や執行部への提言など、今回の行政視察が実りあるものとなるよう、活発な意見交換をお願いいたします。

なお、今回は所管事務調査の一環として、委員間で意見交換を行うものですので、執行部に対する質問については、事実の確認など必要な範囲でお願いいたします。

それではまず、浜松市のものづくり企業と融合したスタートアップ支援の取組について意見交換を行います。

浜松市では、スタートアップ支援の取組内容のほか、ものづくり企業との融合に関する成功事例等について、調査をいたしました。

それでは、意見、提案等がありましたら発言をお願いいたします。

ここで副委員長と交代します。

（委員長と副委員長が交代）

○副委員長（渡辺修一君）吉田委員。

○委員（吉田幸正君）まず私からですけれども、現地へ行きまして、やっぱり浜松市というとスズキ、ホンダから、ヤマハから、すごい超とつく技術都市でありましたが、実はその大企業とのコラボレーションではなくて、むしろ行政が各民間企業を回って、おたくの会社で何か困ったことがありませんかとお尋ねをして、その困った課題を、ネット等を含めて全国のベンチャー企業に発信して、手を挙げていただいたところに支援をすることでありました。僕も地元のベンチャーの育成ではないのですかと質問をしましたが、地元のベンチャーの育成というよりは、地元企業の課題解決に日本のベンチャー企業を活用しようというイメージでありました。私個人としては、ほかの都市の悩みを含めて地元のベン

チャーないしはベンチャー誘致をして解決すべきではないかと個人的には思ったところであります。

北九州の場合はむしろ先進的で、僕は時々ＦＡＩＳに遊びに行くのですが、あそこの技術者の集団はやっぱり非常にフレキシブルにいろんなことができますし、むしろこの町の状況からすると、その体制は既に整っていて、もしかしたら困っていることの課題抽出ができていないのかという気がしました。浜松市の例に学ぶことがあるとすれば、あなたの会社の困っていることを我が町の技術者集団が解決してみせたいと思いますがどうでしょうかと、いわゆる課題解決型をやったことがあると思いますが、あれの抽出がすごく重要ではないかと浜松市の案件では思いました。

実際、北九州市の取組もよく勉強されていらっしゃって、北九州市もすごく頑張っているので、どなただったか、北九州市とコラボしませんかというお尋ねをしたら、都市間競争ですので、我々浜松市は浜松市として日本一のベンチャー支援を目指しますと、言い切った感じはすごいと思いました。これは僕の今のところの所感です。

○副委員長（渡辺修一君）ここで委員長と交代します。

（副委員長と委員長が交代）

○委員長（吉田幸正君）ほかにございましたら。奥村委員。

○委員（奥村直樹君）私が今の質問をしたのですが、同じものづくりで浜松市と北九州市はやろうとしていることは似ているのですけど、地元にいる企業の種類というか違い、強みは多分違うと思うから、そういう意味で取りこぼすというか、うちではできないけど、これだったら北九州市とどうですかみたいなことがお互いできたらいいなと思って聞いたのですけど、今の感じだったら浜松市はできることは全部取っていこうと競争の意識があるのだろうとは感じました。

それであれば、どの都市もそういう感覚でしょうから、北九州市もやっぱりなるべく取っていかなければならない。でも手をつなげるところはつないでいくほうがいいと思っています。そうすればどんな相談が来ても、北九州市に相談すれば、北九州市でなくても受けてくれるみたいな懐の深さがあったらいいと感じました。あと委員長がおっしゃっていた、どちらかというと地元の課題を、東京とか大都市のベンチャーで解決するという方向性だったから、逆かと思っていたのですが、ドアノックで探していますみたいな話をしていました。浜松市内の企業をこんこんこんこんやっていって、困り事ないですかと。その困り事だったら東京のこの企業とつなぎましょうみたいな話だったので、逆のほうが、北九州市だったら東京事務所があるので、東京でこんこんノックしていって、困ったことはないですか、こういうのは北九州市の企業で解決できますよと逆バージョンをやったほうが差別化できるのではないかと感じた次第であります。

○委員長（吉田幸正君）世良委員。

○委員（世良俊明君）私の感想ですけど、今お話が出たとおりですが、スタートアップ自体の事例をたくさん聞くことができるのかと思ったら、そうではなくて、スタートアップ企業はたくさんあって、それと地域企業をマッチングすることが大切だという話のように聞こえたので、少し拍子抜けしたところがありました。ただ、スタートアップ側からすると、北九州市も恐らくそういう支援体制は基本的には整っているだろうと思います。

ただ、問題は、浜松市はスタートアップ企業の支援も１年だけで、後は分かりません、統計も取っておりませんみたいな話でした。果たしてその支援というのは、未来永ごう続けることはできないし、規模の問題も、あるいは資金力の問題もあるので、スタートアップ企業をスタートアップのままでずっと支援し続けているのは、本来あるべき姿ではないだろうと思いますが、１年で後は分かりませんという話はいかがなものかと若干気になりました。

一方で、奥村委員が言われたように、地域企業と言われたと思いますが、地域企業とのマッチングをどうするかが一番主要な課題のように見えたのですけれども、恐らくうちも同じようなことでしょうけど、スタートアップ企業はたくさんある。しかし、それを地域企業とどうやって生かすか、分社化なり何なりで生かすかということに対して探しているけれども、なかなかそういう意識がないので、市側から働きかけてその事業ができるようなマッチングを努力していますというお答えだったと思います。恐らく北九州市もそうだと思いますが、大企業は多分自己完結していると思うのです。中小あるいは零細というか、中小企業は北九州市も同じようにそういう問題意識があるかというと、そういう問題意識はあまり見えないのかもしれません。例えば女性の働き方とかに対して、こういうことをしたらもっとよくなりますよと働きかけしながらやってきた例があると思いますが、同じように、そこに問題意識がきちっとあればマッチングしていくのは自由にできるでしょうけど、なかなか大企業以外は難しいのかもしれないと思います。そこを生産性の向上につながりますよと、そういう別の支援の仕組みの中でこうしたマッチングをしていきながら生産性を上げていく視点でやる、スタートアップ企業とのマッチングをしていく仕組みをつくる必要があるのかもしれないという気がしました。

○委員長（吉田幸正君）高橋委員。

○委員（高橋都君）先ほど皆さんが言われたように、ものづくりという視点で浜松市から学ぶことがたくさんあるのではないかと思って、私も今回期待をしていきました。

ものづくり企業とスタートアップとのマッチングが一番という感じで、先ほど言われたように、こちらからものづくり企業もドアノック式で公募をして、そこから企業に出てもらって、それに対してまたいろいろなスタートアップ企業、今回たくさんの企業が手を挙げたということですけれども、やっぱりそこのマッチングがうまくいかないと次の基幹産業の創出にはつながっていかないと思いました。なかなかそれを継続して、その１年間だ

けの支援で実際にはどんな成果を出しているのか、何をするのかと、１年で本当にその成果が出るのかと私は思いましたが、最初の支援のマッチングだけが行政の役割なのかと感じました。だけど、これは伴走型である程度は支援を、金銭的なものは別としても、やっぱりそこに伴走していく必要があるのではないかと感じました。

それとあと、今回金銭的な面ではベンチャーキャピタルがかなり手を挙げたということと、あと金融機関が10社ぐらい入っていました。北九州市はどうなのかをお聞きしたいと思いました。

それと、これは私の聞き違いかと思うのですが、いまだ実装には至っていないと最後言われたと思うのですけど、間違いないですよね。だから、そんなものなのかと思いました。本当にこのスタートアップ戦略は、これまでやって、今度目標をかなり上げていますけれども、そこに至っていないと。もうちょっと深堀りしたかったと思いました。

北九州市は今後やっていく上でも、ネジチョコのことを委員長が言われて、私はもう本当に拍手を、あれはすごいと思っていたので、新たな産業が生まれたのはすばらしいことで、北九州にはまだまだ可能性がたくさんあると思うので、やはりそこのマッチングは大事なことであって、それを周知していくことが一番重要であると感じました。以上です。

○委員長（吉田幸正君） ここで副委員長と交代します。

（委員長と副委員長が交代）

○副委員長（渡辺修一君） 吉田委員。

○委員（吉田幸正君） 浜松市の場合は１年間で、案件によるが最大１億円でそこまで到ったことがないということでしたが、１年でその後はいわゆるファンド、ベンチャーキャピタルに入ってもらって、民間のお金を投資してもらうことが望ましいと考えていらっしゃったのですけど、今、高橋委員が言われた、ファンドにつなぐような仕組みはこの町の中にありますか。

○副委員長（渡辺修一君） スタートアップ推進課長。

○スタートアップ推進課長　北九州市も認定ベンチャーキャピタル制度をつくっておりまして、今26社認定させていただいていますが、そこと連携することで、もし本当に出資等、あと支援が必要であれば、そこにつなぐことができる仕組みはつくっております。以上でございます。

○副委員長（渡辺修一君） 吉田委員。

○委員（吉田幸正君） ありがとうございました。

○副委員長（渡辺修一君） ここで委員長と交代します。

（副委員長と委員長が交代）

○委員長（吉田幸正君） ほかにございますか。本田委員。

○委員（本田一郎君） １点だけですけれども、浜松市のファンドサポート事業において、

事例として32社に対して11億円を補助したというところで、その際に22億円の経済波及効果があったとお聞きして、そういった企業が地域に定着をして、そしてＭ＆ＡとかＩＰＯ、また、ユニコーンはまだ出ていないらしいですけれども、そういったところを目指していくという話をお聞きしました。

そういった部分は北九州市も当然やっているとは思いますが、そういったところを目指してやっていただきたいと思いました。私からは以上です。

○委員長（吉田幸正君）ほかにございましたら。ここで副委員長と交代します。

（委員長と副委員長が交代）

○副委員長（渡辺修一君）吉田委員。

○委員（吉田幸正君）私から１つ質問をさせてください。

実際に職員が企業を回ってお困りなことはないですかと、ノック式という表現をされていましたが、北九州市は何か課題解決型ということをやったことがあると思うのですけど、この町の課題抽出は今どういう状況でやっていますか、教えてください。

○副委員長（渡辺修一君）スタートアップ推進課長。

○スタートアップ推進課長　今年度まさに地域課題、行政課題、企業の課題をスタートアップ、また、ひいては市内企業と一緒に解決していこうという仕組みを本当につくっていこうとしていまして、少しずつ市内企業にもヒアリングを始めているところであります。

委員から出たとおり、やはり企業によってなかなかスタートアップと一緒にやっていこうという視点がまだまだなかったりというところは少し感じておりまして、今スタートアップは革新的な技術とかアイデアを持っていますので、市内企業にとっても生産性改革とか新しいビジネスチャンスの創出につながりますよと、少しずつ丁寧に御説明をしながら、一個ずつ事例等もお見せしながら一緒にやっていきましょうと巻き込んでいこうと考えております。以上でございます。

○副委員長（渡辺修一君）未来産業推進部長。

○未来産業推進部長　今の課長の説明に補足ですけれども、今年度まさにそういったプラットフォームを構築しようとしておりますが、これから始めるのではなくて、もともと冒頭に委員長よりＦＡＩＳをお褒めいただきましたけれども、日常的にそういった企業の困り事はＦＡＩＳを中心に、あと私ども産業経済局も受けております。そうした中で、困り事に対して必要なマッチングをやってきております。それは従来からやっていることでございまして、そうしたものをもう少し仕組み化をしてきちんとマッチングをしていくと。それをデータベース化していって、きちんと仕組み化して今年度からやっていこうということでございます。

そうした中で、スタートアップとのマッチングですけれども、これはやはり全国的にそういったことが増えておりまして、北九州市でもスタートアップをどう成長させるかとい

ったときに、やはり地域企業の課題、これを解決させること、それがスタートアップにとってはビジネスになりますし、一方で地元の企業にとっては課題解決とか成長につながるので、実際にそういったマッチングをやって、既に具体的なビジネスに取り組んでいる企業も幾つか出てきている状況でございます。以上でございます。

○副委員長（渡辺修一君） 吉田委員。

○委員（吉田幸正君） ありがとうございました。

これは僕からの要望としておきますけれども、いわゆる地域課題。さきに出ましたネジチョコについても、世界遺産に八幡が選ばれたときに、お土産がくまモンクッキーしかなかったのが課題として、それを解決しようというのが一つの課題の抽出だったと思います。多分地域の課題、企業の課題と向き合っている議員も非常に多いと思いますので、その事業スキームのいわゆるチラシみたいなものが出来上がったら、ぜひ議員にも、我々にも配付をしていただいて、こういう事業を北九州市でやっていますので、課題解決を経済の発展にしましょうと、一緒に取り組めばと思いますので、チラシができたらまた御案内をよろしく、もしできていればよろしくお願いします。以上です。

○副委員長（渡辺修一君） ここで委員長と交代します。

（副委員長と委員長が交代）

○委員長（吉田幸正君） 奥村委員。

○委員（奥村直樹君） 今の件ですみません。

さっき浜松市はそのときの課題解決を主に市外のベンチャーに目を向けていたのですけど、うちとしてはどうですか。やっぱり東京とか市外のみという感じですか。

○委員長（吉田幸正君） スタートアップ推進課長。

○スタートアップ推進課長 まさにそこも検討するところではございますけれども、市外のスタートアップに北九州市へ目を向けていただくことで、また、こちらに拠点をつくっていただくとかの事業展開、北九州市で拡大していただける可能性につながりますので、そこは視野に入ってくると思います。以上でございます。

○委員長（吉田幸正君） 奥村委員。

○委員（奥村直樹君） もちろん外の知恵をいただくのは大切なので、ぜひお願いしたいですが、委員長が視察でも言っていたのですけど、地元のベンチャーにももちろん積極的に頑張ってほしいので、例えば、そのアドバンテージとして、先に地元だけに募集をかけて、それでなければみたいな形もあるかと思うけどと、委員長がおっしゃったのですが、どうですか。

○委員長（吉田幸正君） スタートアップ推進課長。

○スタートアップ推進課長 本年度スタートアップ支援に関する事業の中でやはり市内のスタートアップにもう少し重点的に支援できないかという課題感がありましたので、今年

度は市内のスタートアップに限った枠を設けまして、そこで公募をかける予定でございます。以上でございます。

○委員長（吉田幸正君）奥村委員。

○委員（奥村直樹君）分かりました。頑張ってください。

○委員長（吉田幸正君）ありがとうございました。よろしいですか。

それでは、ほかになければ、次に東京都大田区の物流拠点化推進の取組について、意見交換を行います。

東京都大田区では、国内最大級の物流施設である羽田クロノゲートなどを視察し、物流拠点化推進の取組について、調査をいたしました。

意見、提案等がありましたら、発言をよろしくお願いいたします。

ここで副委員長と交代します。

（委員長と副委員長が交代）

○副委員長（渡辺修一君）吉田委員。

○委員（吉田幸正君）例によって私からですけど、クロノゲートは大変勉強になりました。行政からぜひにと話もあったので、私もどんなところかと思ったら、百聞は一見にしかずというのが正直なところで、物流のＩＴ化というか、人があまり触れずにやっていて。僕は、物流は雇用を生むのかとまあまあ大きな疑問があったのですけれども、クロノゲート自体は実際に4,000名が働いていらっしゃって、かつ守秘義務みたいな話もありました。一日も早く対応しなければならない事業において、クロノゲートの中で、その企業がブースというかスペースを構えて、医療品の洗浄という言葉は使ってよかったと思いますが、医療品の洗浄をすることによって、３日、４日かかるところを１日、２日で送れるようになると、物すごい単位の在庫を減らすことができてウィン・ウィンですと衝撃的な話でありました。

それで、北九州市にも西のクロノゲートがあれば、東のうんぬんとやってほしい思いもありますので、そこについてはぜひいい議論をしていただけたらと思います。大変勉強になった案件でありました。私からは以上です。

○副委員長（渡辺修一君）ここで委員長と交代します。

（副委員長と委員長が交代）

○委員長（吉田幸正君）ほかにございましたら。高橋委員。

○委員（高橋都君）私も今回２回目だったのですが、やはりもう感動と言っていいぐらいすごいと、ここまで来たかと感じました。

その中で言われていたことで、もともとヤマト運輸は商品をお届けするというか、運ぶのが仕事だと思うのですけど、なるべく動かさないと言われました。どういうことかと思ったら、触らない、傷めない。そこの中を大事に使うことだろうと思いました。これはや

はり発想がすごい。あと、ものを大事にする理念から来ていると、いろんなことが進んでいるとすごく感じました。

先ほど言われたように、医療のところはすごいです。これは各医療機関と契約するのではなくて、やはり医療機器を扱う事業者との契約でした。それで、ちょっと聞けなかったのですけど、どこの範囲までの医療機器がそこに集まって動くのかと思って、先ほど東と西と言われましたけど、今度北九州市でも実際にヤマト便が動くわけですけれども、そこの施設でどの程度のことを、ただ場所だけの提供なのか、何かそこでこういった事業はできないのか、まだそこまでは至っていないのかと感じました。

実際に医療と印鑑もありました。それとコーヒーのメーカー、何でしたか。

○委員長（吉田幸正君）メーカー名は多分言っては駄目だと思う。

○委員（高橋都君）言っちゃいけないですね。いろんな企業が入って、そこで完結することは本当にすごいと思いました。いろんなところが参入できるのではないかと思ったら、ぜひ北九州市でもそういうことを考えられないのかと思いました。羽田だけではなくて、北九州市でもそういう拠点をつくってもらったら、もっともっと発展するのではないかと感じましたので、ぜひその辺のところも考えていただきたいと思います。以上です。

○委員長（吉田幸正君）奥村委員。

○委員（奥村直樹君）今の高橋委員と同じ感想ですけど、私も行って思ったのは、ネットの業者のものをそこで完結するのは、本当になるほどと目からうろこでした。最初に聞いたときは、ネットだからどこからやっても一緒なので、これをそのまま北九州市でできるのかと思って聞いたときに、デジタル系がほとんど首都圏なのでこっちがいいと言われて、ああなるほどと。ということは、逆に北九州市でやるメリットを考えたら、相当考えていかないと、どこでもいいものではない。要は荷物を動かさないほうがいいのであれば、当然首都圏や人口が多いところに近いほうがいいとなる。それなら北九州の強みは何だろうともう一回考えなければいけない。陸海空がそろっている話もよくしますが、モーダルシフトはほとんど進んでいないという話もあって、そうなってくると本当に、では何が強みなのだろうと考えていかないと、改めて北九州市での強みをもう一回考え直さないといけないと課題感を持って私は帰ってきました。

今何をすればいいとは、答えはないのですが、今言ったように、強みと思ったところが必ずしも強みと言い切れないのかもしれないと、また新しい北九州市なりの強さを考えていかなければならないと思いました。取りあえず現時点で以上であります。

○委員長（吉田幸正君）ほかにございましたら。ここで副委員長と交代します。

（委員長と副委員長が交代）

○副委員長（渡辺修一君）吉田委員。

○委員（吉田幸正君）１つ質問をさせてください。現在ヤマト運輸が北九州市に建屋とい

うか、飛行機も含めてですけれども、クロノゲートとは言いませんが、現状でのヤマト運輸の報告できる事業内容を教えていただくことはできますか。

○副委員長（渡辺修一君） 物流拠点推進室次長。

○物流拠点推進室次長　現在のところ、ヤマト運輸が施設として構えているのは、空港の滑走路というか、エプロンサイドに上屋を建てています。これは飛行機に登降載するための荷物を、どうしても陸送のトラックで持ってきて、そこでさばいて、例えば航空コンテナとかに載せる作業をするところであって、それはもう港湾もですけれども、物流インフラの手前の上屋は、あくまでも荷さばきしかしない施設です。現在ヤマト運輸は、各地から実際にパッケージしたものをこちらに持ってきて、そこで積み込む作業をして積んでいるといったことが今第一段だと思っています。

我々としては、ヤマト運輸に限らず、今奥村委員もおっしゃったように、北九州市での強み、動かさないものをいかに機能としてここに集積させるか。そこで雇用を生むと。実際に動かすものの人の雇用よりも、先日のクロノゲートでもお話しされたように、ドライバーよりも圧倒的に庫内作業をされている人数が多かったと思います。作業をする方、特に女性の雇用だとか、高齢者の雇用も結構丁寧にやられる。物流が３Ｋできつい肉体労働だというイメージとは大分変わったかと思いますが、いわゆる物流をちょっと変えて、付加価値をつけてもうちょっと高度にすることは、ヤマト運輸に限らず、今我々が物流拠点化構想で雇用を生み出すために考えているところでございます。ただそういった機能も施設もちょっと北九州市には不足しておりますので、その両面から今誘致をしていると。まず施設がないとできない。ただ、ああいうことをする人がいないと施設もできない、鶏が先か卵が先かですけれども、どっちも今頑張っていきたいと。ヤマト運輸にも当然北九州市で同じような、なかなか首都圏と同じようなものはできませんけれども、ただ北九州市の強みというのは、首都圏で軽いものを加工するのは、都内でできるのですけど、逆に首都圏は当然床代が高いので、大きなものだったり、大きさに対してと床に対しての付加価値はトレードオフの関係になると思いますので、逆に北九州である程度アセットしたものを首都圏に持っていくという強みもあろうかと思います。アジアから材料を輸入して、ある程度半加工にして首都圏に持っていく中継点というのはあり得ると思っています。そういったところをヤマト運輸に限らず、今物流事業者に提案して誘致を働きかけているところでございます。以上です。

○副委員長（渡辺修一君） ここで委員長と交代します。

（副委員長と委員長が交代）

○委員長（吉田幸正君） 世良委員。

○委員（世良俊明君） 私の感想は１点ですけど、そこはすばらしい施設でした。そこでお聞きしたら、ヤマト運輸の全体のシェアでは、トラック便が98％でした。航空便は１％ぐ

らいだったか。要は圧倒的なシェアがやっぱりトラック便で、そう考えると、航空便が今倍増したとしても、そんなに構造に影響を与えるものではないという状況、現実が分かりました。現実は変わらないですけれども、やっぱり改めて、航空便を含めた物流をさらにレベルアップしていく必要があると思いました。あそこで羽田の責任者の方に、ヤマト運輸の農水産物をはじめとする生鮮物についてはどうでしょうとお聞きしたら、いや大いに期待していますとお答えいただいて、非常に頼もしかったです。そうしたものを含めて、さらにそういう体制を地元北九州につくっていくことが必要だと思いました。クロノゲートに関していくと、やはりトラック便を中心にしたところでしょうから、同じヤマト運輸の中でサザンゲートでしたか、それがあるとお聞きしていますけれども、これは食品の加工も含めた農水産物をアジアと結ぶ仕組みになっていると思いますが、そうしたものも今後されたらどうかと思います。航空便を中心に、どのようなものをここでさらにレベルアップしていくかという仕組みを視野に入れるとすると、少しトラック便を中心としたクロノゲートという施設の誘致とは若干違ったものになるのかと改めて感じました。

○委員長（吉田幸正君）ほかにございましたら。渡辺徹委員。

○委員（渡辺徹君）今言われたように、せっかくヤマト運輸の航空便が北九州に発着するようになって、ビジネスチャンスは本当にあると思います。そうした中でヤマト運輸も一番に期待しているのは、当然トラックを使いますから陸路、それと船です。それができる北九州市は、好条件に恵まれていますと言うのですが、我々北九州市も皆もそうですけど、誘致して一生懸命やっているのは、ただ地域がどう潤っていくかです。そのために今委員長が言いましたけど、雇用をどう増やしていくか。それで、今説明がありましたけど、クロノゲートみたいな形で当初ヤマト運輸はあまり大きくは捉えていなかった。ただ、荷物をうまい具合にさばくところですが、北九州市のほうがこういった利点がありますよ、こういうふうに生かせるよと。特に今言われた生鮮は、本当に期待しているところがあると思いますので、どうこの北九州市を活用して生かしていくか。今フェリーの東京便でさえ１日で速く行けるから出しているのですよね。そういったものもありますから、うまい具合にそれを各方面に散らばせていただくように、雇用をしっかり増やすためにも、拠点となるものがやはり絶対必要だと思います。相手の理解も必要ですし、やはり北九州市の熱意が、皆の熱意がやっぱり一番必要だと思いますので、将来を考えて、ただ結節点だけではなくて、ここにしっかり雇用を生むための努力は絶対に必要だと。それも何とか生かしていけるのではないかとヤマト運輸も思っているところですので、委員会で我々自体が一緒になって、地域おこしのためにもしっかり頑張っていきたいと感じました。

○委員長（吉田幸正君）本田委員。

○委員（本田一郎君）先ほど委員長からもありましたけれども、医療器具の洗浄をしているスペースが、通常は衛生面を担保、確保するために見れなくて、シャッターがしてある

のですが、開けていただいて、私たちは見学をさせていただきました。24時間体制でやっていることと、先ほど雇用の問題がありましたけど、高齢者の雇用というか、見た目ですけれども、60代、70代の方もいらっしゃるのではないかというくらい年長者の方が多くて、うまくそういう雇用もされていると感じました。

担当者の方から、先ほどから集積の話が出ていますが、西日本エリアのチャンスもすごくあると話がありましたし、航空貨物の便の縁でまたさらにそういった縁も深めていきたいと担当者の方も言われておりましたので、どのような大きな規模の集積場所ができるかは、まだまだすぐにとはいかないと思いますけれども、そこは先方とずっと足並みをそろえて進めていっていただければと思いました。ここだけに限らず、西日本エリアとして、そこの中心として進めていっていただければいいと思いました。以上でございます。

○委員長（吉田幸正君）ほかにございましたら。渡辺修一委員。

○委員（渡辺修一君）最後にヤマト運輸から今の北九州空港の荷さばき上屋がもう手狭になっていて、御要望も出していますというお話をいただいたのですけれども、今その件についてどのように進めているかを教えていただければと思います。

○委員長（吉田幸正君）物流拠点推進室次長。

○物流拠点推進室次長　ヤマト運輸の上屋ですけれども、当初は事務所が300平米、上屋が1,500平米で、北九州エアターミナルのビル会社が整備したところに入るといった形でスタートしています。早速荷物のオペレーションとかいろいろやっていると。今は１日３便しか飛んでいないですけど、最終的には10便飛ぶ計画で、それは今の３機体制でもそれぐらいいくので、そうなったときにオペレーション上、やっぱりちょっと入りはいりが厳しいということで、今隣にもう1,500平米の増設をされていると聞いております。

この辺の所管は空港企画課で、港湾空港局でしっかりヤマト運輸とコミュニケーションを取りながら空港周りの必要な施設については整備していく形で取り組んでおります。以上です。

○委員長（吉田幸正君）ほかにございましたら。世良委員。

○委員（世良俊明君）１点、大田区のイノベーションシティーになりますが、この中に大田区のものづくり企業の紹介と、それからマッチアップもできるコーナーがありまして、こういうものが工夫されていると注目をしたのですけれども、我が市でも多分そうしたものがあったらいいだろうと。あるのかもしれませんが、その辺のところが工夫されていく必要があると思いました。一方でイノベーションシティーは、東京の羽田で、あの時間帯に行っても必ずしも人が多くないという状況で、イベントのときだったんですかね、コンサートか何かあった。ビルに関しては投入資金の割に事業効果があるのかどうか、そういう気もしますので、同じことをやる必要はないと思いますが、先ほどのテーマと一緒ですけれども、地元の企業に対し、地元企業を紹介して、地元企業とマッチアップできる仕組

みの工夫がされていたところがあるので、参考にはなったと思いました。せっかく行ったので、それをちょっと付け加えます。

○委員長（吉田幸正君）奥村委員。

○委員（奥村直樹君）私は、やり方がやっぱりもったいないと思って。浜松市で聞いたときに、自分のところのベンチャーとかに結びつけてうまくいっているのは京都市と大田区だというお話をされていた後にちょうど見に行ったので、ちょっと感慨深く見たわけですけど、ただ、行ったら並べているだけのいかにも本当に力の入ってなさを感じて、ただ、置いているものはビー・ツー・ビーのものがほとんどだったと思います。あれは一般の方が触れることで、北九州市で言えばそれこそ今やっている地元の中小企業の魅力発信とかにまさしくなるなと思いました。ただ、場所の工夫とか発信の仕方はあれでは駄目だと思いました。お土産コーナーもありました。地元のものづくりの会社がつくったものをお土産で売っているのをちょっと見たいと思ったら、物すごい奥地の誰も絶対こんなところに来ないよみたいな場所で、聞いて行っても迷ったぐらいの場所でした。あれはもったいないと思って、多分やっている感だけと思ったのですけど、でもあれは本当に機能したら、お土産のない北九州市にとって、あのようなものづくりのお土産って面白いなと。めったにないものだと思うので、ああいうのは本当にやり方だと思うので、あれを食っていくぐらいのものがあってもいいと思いました。意見です。

○委員長（吉田幸正君）ほかにございましたら。

では、何となくの総括ですけど、当然ヤマト運輸に限った話ではないと思いますが、物流拠点都市を目指している我が市にとっては、渡辺徹委員も言われたように、雇用と税収がすごく大事で、物が動いていくだけではそこにお金が落ちないということも、何となく不安な話ではありましたが、雇用も一つの方法として見えたと思います。

この間テレビを見ていたら、北海道の牛乳を空輸して沖縄に送っていて、沖縄の人からするとその牛乳がめちゃくちゃおいしくてふいているという話を見ました。だから、沖縄の人が北海道の牛乳を飲むのかなと思ったのですけど、社会の事実としてそういうことがやっぱり起こっていますので、我々は西側というか、農産品を含めて、魚もありますので、何かいい企業誘致につながるようにと。あとはこの町でやることによって、事業者にとってどういうメリットがあるのかだと思いますので、例えば土地を安く貸すこともそのメリットの一つでしょうし、また一つは補助金だろうとも思います。ですから、議論がありましたらぜひ企業誘致側とよく連携をしていただいて、我々も全力を尽くしてと思いますので、メリットがある企業誘致をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、ほかになければ、最後に、千葉県の地域未来投資促進法を活用した産業用地の確保及び企業誘致の取組について、意見交換を行います。

千葉県では、成田新産業特別促進地域の取組内容や、地域未来投資促進法に係る千葉県

内の基本計画などについて、調査をしました。

意見、提案等があれば、発言をよろしくお願いいたします。

ここで副委員長と交代します。

（委員長と副委員長が交代）

○副委員長（渡辺修一君）吉田委員。

○委員（吉田幸正君）最初にやりますと、僕たちは千葉県庁に行きましたが、やっぱり話の判断は現場、成田市なのだなというのが率直な感想でした。成田市の人たちの苦労も正直聞きたかったところではあるのですけれども、実際、経済港湾委員会でも地域未来投資促進法をやれやれという話があるのですが、例えば農地があって、その隣の農地の人が私は嫌ですと言えばその開発ができないみたいな事実もあるとすると、相当高いハードルだと率直に思いました。地元の先祖来の田んぼの話でありますので。ですから基本的には民間事業者の取組ですと何度も繰り返された感じではあったのですが、同時にやっぱりそれだけでは進まないと思いますので、こっちの農地を御紹介しますとマッチングをしてうまくいった例もあったとお聞きしましたので、行政としてどういうことができるかは今からだと思います。民間にお任せというと、簡単に農地を産業用地にとは難しいと率直に思いました。成田はまた新しい滑走路もできて、世界を視野に、土地が足りませんという状況も同時に事実でありましたので、資料では現場は必ずやる覚悟が見えました。我々の町も土地が足りないことも事実ですので、しっかり向き合ってやっていかないとというのが率直な感想でした。私からは以上です。

○副委員長（渡辺修一君）ここで委員長と交代します。

（副委員長と委員長が交代）

○委員長（吉田幸正君）世良委員。

○委員（世良俊明君）私からは、今委員長がおっしゃったとおりですけど、やはり県はこの問題について当事者意識はあまりないのだなというのが率直な感想でした。

ただ、千葉の状況はやはり先ほど委員長がおっしゃったように、営農中の農地をこの地域未来投資促進法で転換するのはなかなか難しいことだろうと。特に場合によっては近郊農業として成立する場所なので、そうした生きている営農中のところを産業用地に転換するのはなかなか難しいだろうと。

そうすると、そこが将来的に失敗しない仕組みづくりとして、その担保のためにこの取組をやっていますと、そういう色合いがかなり強い説明でした。ですから、ここは北九州市とはかなり違う部分なのだろうと。今は県知事ですが、千葉市の前市長の熊谷市長が言っていたことが気になっていて、公共として産業用地をつくってきたのだと。公共でやるからこそ大規模な産業用地を長期間かけてつくることができると。これが民間であれば直ちに固定資産税等が入ってくるので、すぐにでも実現をしなければならないと。ところが、

そうすると長期にわたって大きな我慢をしなければならず、大規模な産業用地はなかなかできないんだと。だから、ここに公共のやる意味があるんだと彼が言ったことがあるのですけれども、その同じ質問をぶつけましたら、いや県としては何もやっておりません、私たちは全然造成することはございません、全て民間でございますという話になったので、がくっと来ました。

そこでちょっとお尋ねですが、うちはこれまでの議会のやり取りの中でも、産業用地を造成して企業に進出していただきたいということがありましたし、過去に港湾の用地造成も当然あったわけですが、うちの今の状況と方針といいますか、少し対比してみたいと思いますが、その点についての御説明があれば。市としての産業用地の造成の方針といいますか、もちろん民間でもやっていただくのは当然ですけれども、説明を少しいただければと思うのですけど。

○委員長（吉田幸正君）企業立地支援課長。

○企業立地支援課長　世良委員が御指摘のとおり、産業用地が不足しているのは周知のとおりだと思います。従前から御説明しているところでありますが、この地域未来投資促進法を活用して民間に動いてもらって産業用地をつくっていく。

一方で、御指摘のとおり、市が所有する産業用地については98％ぐらいもう売れてしまっているので、そこに早期に対応するために、今学術研究都市の第２期の産業用地について再整備の検討を進めているところでございます。

その先、将来的なところについては、今例えば港湾で埋め立てられているところとかが、また新たに産業用地として出てくると考えていますので、そういうところを活用しながらと思っていますけれども、さらに加えて、市として新たな土地をつくっていくべきかは、今後も勉強していきたいと考えている現状でございます。以上です。

○委員長（吉田幸正君）企業立地支援部長。

○企業立地支援部長　補足させていただきます。行政、公共がやるのがいいのか、民間がやるのがいいのかという議論ですけれども、民間がやるとやっぱりスピード感があります。これだけ製造業の国内回帰が進んでいる中で、ＴＳＭＣもそうですけど、すぐにでもつくりたいと言ったときに、公共が整備するといろいろ入札ですとか、予算を取ったりとか手続が非常に長くかかりますので、そういった意味で早急に対応すべきものは、やはり民間の力を活用するのが一つの方策だと考えております。以上です。

○委員長（吉田幸正君）ほかにございましたら。香月委員。

○委員（香月耕治君）私は視察に行っていないので、千葉県というか、その実情はちょっと分からないですけど、地域未来投資促進法の活用では、私は北九州市にとってある意味最後のチャンスが来たと思っています。

調整区域をいかに使うか。農地だけではなくて、調整区域をいかに使うかに関しまして

は、先日熊本の菊陽町、ＴＳＭＣにちょっと行ってきました。まさに北九州の調整区域のような地域に道路整備がきちっとできていますけど、そういうところに大型の企業誘致が進んでいるなと。

これは現実の話で、市街化区域の中にこういう立地は到底できない。これはロジスティックといういろんな問題があって、交通のいろんな利用を考えたら、まさしく調整区域は使えると思います。調整区域で農地がある意味整備された土地ではありますが、今あるところで、物流関係の区画整理組合が推進をして組合ができたということです。ここは市の土地と農地が半分ずつということで、これは市街化区域なのでちょっと事情が違いますけど、農家の事情ということでは、さっき言った成田が農業的に商業的なレベルにあるかどうかは確認していませんけど、北九州の米作りというか、そういう農地に関しては、農業所得も考えて後継者もいないというところで、そういう事業を早く自分の元気のいいうちにしてほしいというのが、私は現実だと思っています。

そういう観点から考えて、この地域未来投資促進法をいかに活用するかは、北九州市にとって最後のチャンスと思っておりますので、やはり積極的にしていく。さっきもロジスティックと言いましたけど、市街地で物流をする時代は終わったと思っています。周囲が市街化されていない、そういう地域でないと、交通の渋滞等々があって大きな搬入、搬出では、大変問題があるし、その点北九州市の今の高速道路のインター周辺は全部調整区域にあるわけです。それをやっぱり活用するのは、北九州市にとって、この法律は大変有意義というか、活用できる法律だと考えています。また地権者にとっても有意義というか、米作りということだけでは。だから都市近郊農業等々が発展した地域であれば、やはり農業だから、食料安保ということを考えても、農業を大事にしないといけないけど、もう一つやっぱり考えないといけないのは、土地の荒廃、農業用地の荒廃等々が考えられるので、やっぱりそれは雇用を増やすとか、そういう意味合いでの視点を持ってするべきだと思います。

陸海空の物流の拠点ということで、雇用の問題はいろいろあります。でも、私は陸海空の雇用ということで、そこで終わるのではなくて、九州の物流拠点を提案しましたけど、その物流拠点を使う新産業を、その周辺に立地させることがその先の戦略だと思っていますので、北九州市も長いスパンで考えられる経済戦略をぜひ考えていただきたいと思います。以上でございます。

○委員長（吉田幸正君）渡辺徹委員。

○委員（渡辺徹君）今言われたとおりで、実は私もかなり期待して行きました。こういう質問をしたこともあるのですが、いかにこういった農業用地とかを物流拠点化だけではなくて、ほかの用途にしていくかと。あまりにも市街化調整が入っていて、もう手つかずでそのままというのが意外と多くて。また、今最後のチャンスと言われたと思うのですけど、

やはり地権者もこれをこのまま放っておくと、門司区でも一部あったのですが、誰が持ち主か分からない、結局二十何人持ち主がいて、それをたどるのが大変でという形になってしまって、先送りになると本当にそれがずっと分からなくなってくると思います。

今北九州市が開発するというか、物流にしろ、工業にしても土地自体があまりにもないことで、その周辺をどう活用していけばよいか。それで千葉県で話を聞いたら、もう全然話も違うし、これは参考になったのか。ただ、農地活用をしっかりやっていって、計画的にやっていくことが一番大事というのがよく分かって、規模はあまりにも違い過ぎるので、総合的に産業経済局だけではないと思いますから、空港も港湾もそうでしょうけど、いろんなものを生かしていただいて、この北九州の財産を、土地をどう生かしていくか。そして、次の世代にどうつなげていくかがやっぱり一番大事だと思います。そのためにも、せっかく物流拠点で動き出した空港も、そしてまた高速のフェリーも、いろんな活用方法がある中で、それを基とする土地といいますか、拠点がどう生かされていくかが今から一番大事になってくると思います。

それで、人口減もどんどん進んでいる中で、この北九州市においでいただくというところをしっかり頑張っていかないといけないと感想ですけれども思いました。

○委員長（吉田幸正君）ほかにございましたら。

よろしいですか。

それでは、ほかになければ、本日は以上で閉会します。

また、取りまとめを行いたいと思いますので、よろしくお願いします。

本日はありがとうございました。以上で終わります。

経済港湾委員会　委員長　吉田幸正　印

副委員長　渡辺修一　印